

第三十九回 「全日本中学生水の作文コンクール」 岐阜県優秀作文集

水について考える

主催 水循環政策本部、国土交通省、岐阜県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、

経済産業省、環境省、

独立行政法人水資源機構、

水の週間実行委員会、全日本中学校長会

「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖父母、両親、先生から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について、考えていただくという趣旨で、水の日・水の週間の行事の一環として実施しています。

今年、第三十九回を迎え、国表彰に一作品が入賞し、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を選定しました。

この四作品について、このたび優秀作文集としてとりまとめました。いずれも中学生の皆さんの真剣な思いが伝わってくる作品です。ぜひ御一読ください。

「第三十九回全日本中学生水の作文コンクール」

一. 応募要領

- ① テーマ 「水について考える」(題名は自由)
- ② 対象 中学生(中学生と同じ学齢の者を含む。)
- ③ 原稿 四百字詰め原稿用紙四枚以内で日本語により表記されたもの
岐阜県都市建設部水資源課(岐阜県内の応募者)
- ④ あて先 平成二十九年五月九日(到着分有効)
- ⑤ 募集締切日 平成二十九年五月九日(到着分有効)
- ⑥ 著作権等
 - ・ 応募作品は個人作品に限る。
 - ・ 応募作品の著作権は国土交通省及び岐阜県に帰属する。
 - ・ 応募作品は返却しない。

二. 応募状況 応募学校数 五校 応募総数 二二二作品(一年…六作品、二年…四六作品、三年…百八十作品)

三. 審査

査 応募作品を岐阜県で審査(地方審査)し、五作品を中央審査対象作文として国土交通省に推薦。中央審査において入選以上の者を除き、岐阜県表彰受賞者を選定しました。

目次

国表彰(中央審査)

【入選】

『技術提供という思いやり』

多治見西高等学校附属中学校 二年 根崎 真由(ねざき まゆ)

岐阜県表彰(地方審査)

【最優秀賞】

『水と環境のつながり』

美濃加茂市立西中学校 三年 永原 愛海(ながはら あみ)

【優秀賞】

『生かされ・活かす水の大切さ』

美濃加茂中学校 二年 荒尾 凌太(あらお りょうた)

『く家庭で使う水はどうやって確保しているのか?』

多治見西高等学校附属中学校 二年 板津 渚(いたづ なぎさ)

『技術提供という思いやり』

多治見西高等学校附属中学校 二年 根崎 真由

「こんなに大きな施設、初めて見た。」

小学五年生の頃、私は名古屋市上下水道局の浄水場の施設を見学した。

「こんなに広い施設、どれくらいのお金がかかっているのだろう。」

私が疑問に思っていると、水道局の職員さんが教えてくれた。

「名古屋市にある三つの浄水場は、一年間にだいたい二百五十億円もお金で成り立っているのですよ。ここできれいにした飲み水を、二百万人以上の人々に配っているのです。」

これを聞いて、日本の人口の約一億二千万人に配るにはどれくらいのお金がかかっているのだろうと想像してみた。そして、毎年巨額のお金を使っていると知り、驚いた。

浄水場を見学し、次は、水の循環と書いてある掲示を見学した。そこには、水がどのように各家庭へ配られているのかが絵で説明してあった。まず、海水が温められ水蒸気になり、それによってつくられた雲が雨を降らせる。その雨水がダムや湖にたまり、その水が管で、川から浄水場へ送られ浄化される。そして、きれいな水が水道管を通って各家庭へと届けられるそうだ。水が私達の手に届くまでには、湖や川などの地形や、雨などの自然現象と、ダムや水道管、浄水場などの人間が作った設備がうまく合わさっているからこそきれいな水が飲めるということに感動した。

日本は降水量も多く、先進国ということもあり、設備を維持する財力や水を浄化する高い技術もある。では、発展途上国のように財力が小さい国々は、どのようにして飲み水を手にいれているのだろうか。

発展途上国の中にも降水量の少ない乾燥した地域と、降水量の多い熱帯の地域がある。降水量が少なく砂漠が広がる乾燥帯の国々は、容

易に水を得ることはできない。ある地域では、川に流れている水をくんでくるために、女性や子どもが毎日十キロメートル以上の距離を、ニリットルのペットボトル数本分の量の水を背負って往復している。だから女性は職に就けず、子どもは学校にも行けていないというのが現状だ。私達日本人にとってはただ蛇口をひねるだけのことで、水を手に入れるという同じ行為のために、何十倍もつらい思いをしていると知った。

一方、降水量の多い熱帯気候の国々は、年間降水量が日本を超える所もある。しかし、浄水場設備が追いつかず技術も低いために多くの国が気候の特色を生かしてきれていない。

この現状を知り、水を手に入れられない人々がどれほど大変な思いをして暮らしているのか考えただけでつらい。水は、私達人間にとって必要不可欠なものだ。水を手に入れるために学校へ行けず技術も学べないのだったら、これ以上技術は高まらない。また、技術が高まらなければきれいな水を手に入れることはできないという悪循環が生まれている。そのような国に技術を提供している機関がある。それは、JICAという日本の組織で、発展途上国への国際協力を行っている。浄水場の改修や拡張にも手を貸している。このように、苦しんでいる国の人々を助けることで、誰もがいつもきれいな水を手に入れられるようになることを強く願う。そして、恵まれた日本の自然環境と高い技術があることに感謝し、その技術を一人占めするのではなく、世界中の貧しい国々に伝えることで全ての人が豊かに暮らしていけるようになってほしいと思う。そのために私は、海外の人とコミュニケーションがとれるように英語を勉強し、国際協力ができる仕事に就くことを目標に努力していきたいと思う。

岐阜県表彰最優秀賞

『水と環境のつながり』

美濃加茂市立西中学校 三年 永原 愛海

「節水」。私が今まで聞いてきた「節電」や「ゴミを減らす」というエコに関するものの中で、最も多く聞いた言葉だ。私が高齢の事情で、四国の香川県へ引っ越したときのこと。香川県は昔、毎年水不足になり、日照りが続いたとのこと。香川には、小学校に入学する少し前から住んでいたが、小学校に入学し登校していると、必ず一つのたぬき池のそばを通る。香川県の水源は今となっては、「四国のいのち」ともいわれる早明浦ダムだ。でも昔に、ダムなんてものはない。だからこそため池をつくった。それで、通学路にため池があるというぐらいい多いのだと思った。小学校では、「節電」にも取り組んでいたが、どちらかというと、「節水」の方に力を入れていたと思う。その根拠に、トイレの水道にも廊下の水道にも、「節水」というシールが貼ってあったからだ。もちろん、中学校へ行っても、あった。去年、美濃加茂市へ引っ越してきて、中学校へ転入したとき、廊下の水道を見て驚いた。なぜかという「節水」というシールがどこにもないからだ。手を洗っている様子を見ると、水をだっしっぱなしのまま洗っていた。母から聞いた話では、水不足の心配はないんだとのこと。それでも私は、もったいないと思った。いくら水不足にならないからといって、資源には限りがある。今まで、「アフリカの子供達がどれだけ苦労して水を汲んでいるのか」というのを勉強してきた。香川県の人が二十年以上前に、水までもが配給制になっていたことも知っていた。そんな私がいつも水を使って思うことは、「きれいな水を使えて、私は幸せだな。」ということである。私は、家や学校でも、少しずつだが、節水はしている。歯みがきするときには水を止めるや、手を洗うときに、石けんを使って洗っているときは水を止めるや、うがいするときも水

を止める、などと、親にも誰にも言われずにしている。ほんの少しだけれど続けると後で多くの水を節水することになると思う。言わば、「ちりも積もれば山となる」ということだと思える。こう思えるようになったのは、私が香川県へ引っ越したからだと思う。でもそれが、美濃加茂市で生かされないという意味があまりないのではと思う。美濃加茂市全体とはいかなくても、ごく一部でもいいから節水を心がけて、それが広がると、節電などにもつながり、環境を少しでもよくすることができるとは思わないかと私は思った。

『生かされ・活かす水の大切さ』

美濃加茂中学校 二年 荒尾 凌太

「水」は人間が生きていく為に必要不可欠な物、そして、人間の体は約六十パーセントの水分で出来ているという事は多くの人が知っている。

人間は、一日に最低でも三リットルの水が必要だと防災に関する本にも書かれています。体の中の水が不足すると、脳梗塞や心筋梗塞などの健康障害を引き起こすリスクが高くなります。喉が渇くと思う時、体の中ではすでに脱水症状が進んでいる状態だそうです。

砂糖や塩分の多く入った飲み物は、吸収までに時間が掛かります。また、カフェイン入り飲料やアルコールでは尿の量を増やし、体内の水分まで排出してしまうので水分補給としては適していないことも驚きでした。

水は命を保つために本当に必要な物だという事がわかりました。

「水は、どこから来ると思う?。」
と、五歳の従弟に尋ねてみると、

「蛇口。」

と元気な声と笑顔で返って来た。当たり前のように蛇口から水が出て、そのまま口にする事が出来る僕達の生活。

世界に目を向けてみると一九三ヶ国の内、蛇口の水が飲めるとされているのは一五カ国と言われています。それは、誰でも安全に飲料出来るということであって、必ずしも健康に被害をもたらすという事ではないようです。

毎日、蛇口から水が出る生活をしている僕にとって、首を傾げるような言葉がインターネット上に書かれていました。

それは、水不足が深刻化しているという事。雨が降らず日本でも、

ガムの水が危機的状況になる事があります。そのような一時的な事態ではなく、長期に渡り考えなければならない状態が近づいているという記事でした。

水の惑星とも言われる地球ですが、人口の爆発的な増加に伴って、水は本当に不足しています。

水というと、飲み物などの生活用水ばかりに目が向いてしまいがちですが、食糧生産、工業製品の生産用途で使用している水が多いのです。人口が増えると、生活用水以上に生産用途で使う水が増えていくのです。

それは人間がより良い生活をする為に犠牲にしている一つなのだと思います。水を犠牲にしている事に何人の人が気付いているだろうかと思ふ。

先進国と言われる日本の中で生活をしている僕は、発展を目指す国々の人にどれくらい水での貢献ができるのだろうか。

少しの水で工業生産を上げる方法、水を効率的に使用し安定した食料の生産をする等、大人の方々は色々と知恵を絞り、考え、実行してくれているに違いありません。

その中で僕は何ができるだろう。何をしたいと思うだろう。今の僕には、大きな事をする力はありません。

でも、小さな事ですが出来る事がある。

それは、水が生活を豊かにしている事や、田んぼに水が張られるとキラキラとして輝く事、湖に映る富士山が美しい事、大量の水が流れ落ちる滝の景色がある事を記憶し、その光景を伝えていく事。水の持つ神秘的な輝きを大切にすることは 僕にも出来ると思ふ。

そして忘れてはならない事が一つ。水に生かされているのは、人間だけではなくという事です。川や湖で泳ぐ魚や鳥達、山に生息している動物達、地球に生きている全ての生き物が水によって生かされている事実。その全てを守っていけるのは僕達人間だという事。

蛇口の水を無駄にしないと心掛けるだけではなく、大切な水を安定的に使用できるように、循環させ活かしていかなければならないという事を忘れないように日々生活をしていきたいと強く思った。

『く家庭で使う水はどうかやって確保しているのか？』

多治見西高等学校附属中学校 二年 板津 渚

私は家の暮らしを支えることについて話します。

皆さんは、家庭で使う水をどう確保しているか知っていますか？

私は、小学校の時に行った浄水場で学んだことを再度考え直し、学び直したいと思う。

私たちが毎日使う水がなぜきれいなのか？を疑問に持ち、調べた所、浄水場では取水した原水に浄水処理を行って、安心して飲める安全でおいしい水道水をつくっているということが分かりました。

しかし、私は水の主な源は何か？という疑問があったため、調べました。

水の主な源は川の水であり、その大もとは空から降って雨水であり、雨を降らせるのは海や陸の水が蒸発して大気中にできた雨雲です。

そこから地上に降った雨は川となり、地下水となったりして、やがて海へ戻っていきます。

そして海の水は再び大気中に蒸発し、雲をつくって雨を降らせます。また、地上に降った雨の一部は植物が吸い上げ、葉などから大気中に蒸発して雲の原因のひとつとなります。

私たちは、その水の循環の中で、主に川の水を利用しています。

上流、中流、下流の流域全体で川の水を分け合い、水道用水や農業用水などに利用しています。

また、人間のほか、様々な生き物や植物などの自然も、川の水によって育まれています。

ただ、川の水には、人間の体に有害なウイルス、大腸菌などの菌も含まれています。

そこで、浄水場をはじめとする様々な施設をつくるなど、安全に使用

える水をいつでも得られるようにするために、様々な取り組みが行われています。

様々な取り組みとは、ダムや取水場、水路、そして浄水場、配水場、配水管の事です。

私は、この六つの中で最も分からないことを四つ調べました。

まず水路とは取水した原水を別の川や浄水場などの必要な場所に運びこみます。

次に浄水場とは取水した原水に浄水処理を行って、安心して飲める安全でおいしい水道水をつくる施設のことです。

そして、配水場とは浄水場できれいになった水道水をいったん貯めておく施設です。

四つ目、配水管とは配水場から各家庭の蛇口につながる給水管へ水道を運びます。

こうして色々な検査や取り組みなどを行っているから私たちは安心して水を飲むことができているということが分かりました。

最後に私は今までこうしたコンクールを通してたくさん水のことに関して知ることができました。

自分達にとっては当たり前だったことがおいしい水は私達の知らない所で未来の健康にも繋がる設備、または施設で安心して安全のある水が届けられていることにすごいと思い、関心し、まだ自分が知らない水に関しての知識があると思うとワクワクしてもっと水に関する知識を自分の中で常識になるようにし、将来的には、団体などの活動をつくり、色々な県の方々から募金をしてもらい、日本で当たり前になっていることを外国でも当たり前となるように自分から積極的に活動を行いたいと思います。